

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

No.26

2011年 秋

2 巻頭インタビュー

シンガーソングライター

さとう 宗幸さん

4 知っておきたい教育 NOW

経験から学ぶ安全教育と危機管理

戸田 芳雄

学校の危機対応「地震防災」

矢崎 良明

8 きょういく見聞録

社会とつながる公教育 ～アメリカ・ジョージア州

折原 恵

10 地球となかよしトピックス

まちの未来をともしのは

手作りのLED街灯

京都府長岡京市立神足小学校

12 インフォメーション 北から南から

14 地球となかよしゼミナール

地域の自然とのふれあいが

豊かな学びを育む

こどもエコクラブ全国事務局

15 コラム いまどきコドモ事情

わたしのすべきことは なに？

香山 リカ

16 ほっとな出会い

犬猫写真家

新美 敬子さん



さとう

むねゆき
宗幸さん（シンガーソングライター）

歌い手としての絶対条件は、 聴く人に言葉が伝わること。

子どものころから、ずっと音楽に親しんでいらっやったのですね。

小学2年のとき、急性腎炎で命の危機に陥りました。何とか回復しましたが、心身ともに負担をかけたらいけないというので、入院中は一切勉強などできませんでした。どうしたものかと思案した父が、一本の縦笛を買ってくれたんです。日がな一日吹いて、これが音をつくり、奏でる楽しさを覚えた最初でした。僕が音楽と深くかかわる大きなきっかけです。学校に復帰しても、楽しくて、ずっと吹いていましたね。中学ではブラスバンド、高校ではマンドリンクラブに入って、ずっと身近に音楽

がありました。

その後、25歳でコンサート活動に入る決心をしたんですが、当時僕は、もう結婚していて乳飲み子もいましたから、周りは皆反対。でも、僕は大病で命を落としかけた経験があるだけに、人生は二度あるわけじゃないという思いが強かった。だから、あまり逡巡することなく、自分の好きな道に進もうと決めたんですね。両親も反対しなかった。二人は死線をさまよった僕を一昼夜見ていますから、こいつの人生は好きなようにやらせてやろう、という気持ちがあつたんじゃないかと思えます。でも、やはり経済的に苦しい時期はありました。その後、「青葉城恋唄」

がたくさんの方に支持されたんです

が、この歌が世に出なくても、僕は、歌うことで生きていたと思います。音楽が大好きだから。中学や高校の音楽祭などに招かれて話をするときには、「夢をしっかりと持って一歩一歩歩き続けていけば、100%、必ず報われる」と話すんです。

そのような夢を持った子が、音楽でもスポーツでも進学でも、震災で夢を絶たれることがないようにと、今、宮城県出身のアーティストたちで支援活動を始めています。

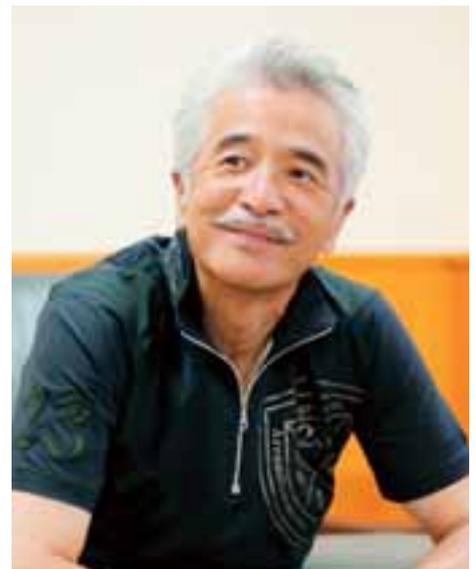
さとうさんの歌う曲の歌詞はみな、とても美しく感じられます。

僕はよく、コンサートで『二度と

ない人生だから』という曲を歌います。詩人の坂村真民先生の詩に曲をつけたものです。真民先生の書かれる詩は、どれも難しい言葉がほとんどありません。「二度とない人生だから つゆくさのつゆにもめぐりあいのふしぎを思い 足をとどめてみつめていこう」。小学生でも知っている言葉で書かれているのに、人の心を動かし、人の心に入ってくる。こういう詩に曲をつけるのはイメー

ジも非常に湧きますし、喜びが大きいです。こういう言葉の感覚を大事にしたいですね。

「青葉城恋唄」は、当時DJをやっていた仙台のラジオ番組のリスナーが詩を寄せてくれて、それに僕が曲



PROFILE

さとう 宗幸

1949年生まれ。宮城県古川市（現大崎市）出身、仙台市在住。1978年、広瀬川などの仙台の情景を織り込んだ「青葉城恋唄」が大ヒット、数々の賞を受賞。ご当地ソングとして長く親しまれている。現在、17年間にわたって、ミヤギテレビの情報番組「OH! パンデス」の司会を務め、多くの世代に親しまれている。

をつけました。仙台に住んでいる人、少しでも仙台を知っている人は、街のイメージや、そこで過ごしたときの思いがふくらむようです。それが長い間にわたって、多くの方々が思い継いでくださる理由のかなと思います。

僕は、多くの学校の校歌もつくらせてもらっているんですが、何々小学校、といった文言はあえて入れません。例えば「花薫る丘」など、その学校のシンボリックなものをメインタイトルにします。卒業して成長したときに愛唱歌として歌い、ふるさとや母校の面影を思い出してもらえるようにという願いを込めています。

僕は、歌い手としての絶対条件は「聴く人に言葉が伝わる」ことだと



「青葉城恋唄」の舞台、「杜の都」仙台のケヤキ並木

思っています。だから、自分が歌詞をつくるときにも、いかにわかりやすい言葉で、いかに聞き手の心に情景や思いがイメージされるか、ということに大事にしています。

子どもたちの夢を支援する「みやぎびっきの会」の活動に、積極的に取り組まれていますね。

「みやぎびっきの会」は、宮城県ゆかりのアーティストが「子どもたちに夢を」を合い言葉に始めたチャリティコンサートプロジェクトです。これまで5年間で、宮城県内の100校近い学校の楽器の修理をしてきました。この活動も継続しますが、今回の震災で、音楽にかかわらず、震災で子どもたちの夢を摘んでしまっただけではない、むしろこういうときにこそ夢を育むべきだと、震災から10日後には「びっき子ども基金」を立ち上げ、支援活動を始めました。

石巻市の高校では、避難所から通学する生徒は、避難所を出る時間はまだ朝食前、当然、弁当を持ってこられる環境ではない。朝も昼も満足に食べられない。そこで教頭先生から連絡をいただき、20人あまりの生

徒に毎日、お弁当を届け続けました。他にも、学校の細かな備品などは、行政にも言い出しにくいし、どうしても時間がかかりますから、「びっきの会」に要請があれば、早ければ翌日に届けられるようにしています。今後、備品だけでなく、進学支援や、さまざまな支援団体との橋渡しなど、長期的に続けていく予定です。

東北出身・在住のアーティストとして、今後どのように活動していきたいとお考えですか。

端的に言うとな「美しいふるさと再生」の応援です。僕は、宮城の情報番組の司会を17年間やってきて、あちこちを訪ね、宮城をはじめ、東北の多くの方々と交流させてもらいました。ですから、被災地のかつての様子、かつての人々の暮らしぶりをつぶさに知っています。東北の自然も、人も、僕にとって慈愛を込めたふるさとです。今までに、多くの避難所に出かけて歌ってきました。今後も請われれば、できるかぎり避難所や仮設住宅に出かけます。

僕は、被災された方々の生の声をたくさん聞いて、しいて復興という

言葉はまだ使わないようにしています。商店や漁業の再開は、確かに明るいニュースで喜ばしい。でも、それにメディアが飛びついて、復旧だ、復興の兆しだ、と声高に言っている陰に、多くの方々の現実が埋もれていってしまうのがつらいんです。

そういう方々に対してもしっかりと目を向けて応援、支援していくこと。それが、東北に生まれて東北の人たちとともに過ごしてきた私の、残された人生でやるべきことかなと。

被災地の皆さんが口を揃えて言うのは、昔のような美しいふるさとに戻ってほしい、美しいふるさとで生きていきたいということです。僕はそのために、残された人生は、皆さんと一緒に歩き続けていきたい、ふるさと再生のために尽くそうと心に決めているんです。全国の方々にも、被災地の人々や子どもたちの、ふるさとへの思いを知ってほしいし、歌うことでその思いを届けられればと思っています。

社団法人 みやぎびっきの会

仙台市青葉区本町1-6-23
ムサシノ仙台ビル3F
電話 021-3307-6000
Mail bjkx@bjkfund.net
ホームページ <http://bjkfund.net/>

危機管理

経験から学ぶ 安全教育と危機管理



東京女子体育大学教授
戸田 芳雄

初めに、このたびの東日本大震災で亡くなられた方々並びに被災された方々に対し、心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。一日も早い復旧と復興を祈念します。

求められる学校の安全教育・

安全対策の充実

学校の危機には、構造的には、①「教育課程」に関すること ②児童生徒や教職員など「人」に関すること ③施設や設備などの「物」に関することがあると考えられる。内容は多様で、火災や自然災害、犯罪被害、交通事故、学校生活や教育活動中の事故に加え、インフルエンザなどの感染症等の発生もある。

学校における安全の確保には、危機管理という視点から、事件・事故などの要因となる学校環境や子どもたちの学校生活における行動等の危険を早期に発見、あるいは、事前に予測し、それらの危険を速やかに除去し、事件・事故を防止することが求められる。管理職や教育行政にあたる者はもちろん、すべての教職員に、そのための資質や能力が必要とされる。事件・事故や災害が発生した場合には、適切な応急手当や安全措置がとれるような体制を確立して、子どもたちの安全の確保を図り、教育活動を円滑に実施し、子どもが、健康で安全かつ安心して、伸び伸びと生活できるようにする必要がある。

東日本大震災では、日頃の避難訓練の有効性が示された反面、あいまいで実際に機能しなかった計画もあった。津波で押し流された指定避難所や学校などもある。また、学校環境や子どもたちの実態や特性には、大きな差が認められる。そのため、これまでの取り組みや今回の震災などの経験も踏まえ、最悪の（想定を超えた）事態を想定したり、自分で学び、危険を予測したり、適切な行動を選択したりする能力を育てることも求められている。

危機管理の視点から見た安全管理の課題

これまで、安全教育参考資料『生きる力』をはじめくむ学校での安全管理』（平成22年3月、文部科学省）などにおいて、前述したよ

うな積極的な意味合いを持たせた安全教育や危機管理を推奨してきた。しかし、現状では、必ずしもそれが実現されておらず、形式的でマンネリ化に陥っている恐れがあるという懸念を持たざるを得ない。

自然災害や事件・事故は、「いつでもどこでも起こりうる。そして、重大な被害をもたらす可能性がある。しかしながら、私たちの努力により、被害を軽減したり、免れたりすることができ。」このような視点から、これまでの安全教育や安全対策の具体的な課題として、次のような事柄があげられる。

- (1) 教職員等の危機意識が低く、事件・事故等が発生した後に慌てて対策を検討。
- (2) 安全点検が施設の破損等のみで、防災や防犯の視点、事後措置も不十分。
- (3) 安全管理が、行動の規制など児童生徒等の活動を制限する方向で進められ、一人一人に安全（危険予測・危険回避）能力を育てるような教育的配慮が不足。
- (4) 避難訓練の実施のみで安全教育が収束し、計画的な安全教育が実施されていないため、実践的な能力が身に付いていない。
- (5) 事件・事故の発生を想定した、事前（日常）及び事後（危機発生時）の教職員の役割分担と果たすべき役割が明確になっておらず、危機管理マニュアル等が機能していない。
- (6) 非常時の通信手段の確保に課題があり、

家庭や地域社会との連携も不十分で、情報の収集や伝達などのネットワークの構築が未整備。

(7) 避難所となった場合の学校と行政の役割分担・連携等が不明確で、食料、毛布等の備蓄も行われていないか、不十分。

(8) 専門家や行政等と連携した個別の学校の危険（校舎、施設・設備、地盤、地勢など）の把握と、それに基づいた確実な安全対策が不十分。

学校における危機管理の進め方

◎「安全文化」の創造

健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養い、心身の調和的発達を図ることは、学校教育の重要な目標である。安全・安心な生活を守るためには、自他の生命や人格を尊重し、経済や効率でなく、安全を最優先する「安全文化」の創造が重要である。

そのうえで、家庭や地域社会と密接に連携した学校安全計画を作成し、計画的な安全教育と一体的に危機管理を進める。その際、文部科学省作成の資料『生きる力』をはじめ、各都道府県、関係機関等の資料を参考に参考にする。

◎事前・事後の危機管理体制の整備・実践

行政機関や地域の関係団体等と調整し、学校独自の危機管理マニュアル（危険等発生時対処要領）を作成し、適切かつ確実な危機管理体制を確立して、危機管理を包括的に進める。特に、自然災害で避難所となった場合の運営の仕方や備蓄、学校の役割の明確化が、改めて重要となる。

危機管理の2つの側面



『生きる力』をはくむ学校での安全教育（平成22年改訂文部科学省）より

◎教職員の役割の明確化、役割分担・訓練

前述の学校独自の危機管理マニュアルに基づき、校長のリーダーシップの下に、安全主任等の安全担当の教職員を中心に活動を推進し、すべての教職員が危機管理に参画することが必要である。平時からそれぞれの役割を分担し、訓練などを通して、マニュアルが実際の場面で機能するように準備する。

◎連携とネットワークづくり

学校と子どもの安全・安心の確保は、地域社会の安全・安心が基盤となるため、保護者

や地域社会の関係機関・団体等と連携を深め、理解と協力を得る努力が必要である。とりわけ、学校の活動に対する参加・協力、地域ぐるみでの取り組みの実施、安否確認や事件・事故に関する情報の迅速な収集・伝達などのネットワークの確立等が必要となってくる。

◎教職員の研修と子どもの関心喚起

特に、地震など自然災害での安全を確保するため、研修等により教職員の危機管理意識を高めるようにする。専門家や行政等と協力した個別の学校の危険（校舎、施設・設備、地盤、地勢など）の把握と、より確実な安全対策の実施を検討する必要がある。また、子どもの興味関心や知的好奇心を喚起し、科学的思考力・判断力に基づいた意志決定や行動選択ができるようにして、災害に対応できる力を育てる安全教育を進めることも、有効であると思われる。

おわりに

近年、交通死亡事故は減少したものの、学校への不審者の侵入や登下校時の犯罪被害、深刻な自然災害が発生し、子どもの安全が脅かされている。

今こそ、これまでの自然災害や事件・事故などに学び、学校・家庭・地域ぐるみで、子どもの安全・安心確保のための短期及び長期に渡る対策を講じる必要がある。

危機管理

学校の危機対応 「地震防災」



東京都板橋区立
高島第一小学校校長
矢崎 良明

本年3月11日の東北地方太平洋沖地震では、津波に関する防災教育や防災管理に大きな教訓を残した。また、東京などの都市部では、帰宅困難や、学校での子どもの引き取り方法などについて、多くの課題が明らかになった。

避難訓練の見直し

放送でサイレンを鳴らし、「地震です。地震です。机の下にかくれましょう」↓「揺れがおさまったようです。校庭に避難しましょう。」これは、今まで学校で普通に実施されている地震発生時の避難訓練である。しかし、この訓練にはいくつかの問題点がある。

サイレンを鳴らす前に地震の揺れがきていること。地震は授業中ばかりではなく、いつでも起きる。また、耐震化されている建物はずっと倒壊する心配はないので、必ずしも校庭に避難する必要がない。東北地方太平洋沖地震の被災地の学校では、校庭に避難したけれど寒さで体育館に移ったことや、校庭が液状化で波打って出られなかった事実がある。大雨や寒さなど、校庭に出られない状況が想定される。これらのことから、避難の方法を見直す必要がある。より現実に近い避難訓練を実施することが大切である。

本校では次のような訓練を実施している。子どもたちには日頃から、緊急地震速報の警報音が流れたら、上から物が「落ちてこない」横から物が「倒れてこない」場所に身を寄せる（避難する）を指導している。東京大学地震研究所から送られてくる緊急地震速報により、震度3以上の揺れが見込まれる場合↓全校放送で緊急地震速報の警報音「ティロンティロン」を流す↓子どもは、「落ちてこない・倒れてこない」場所に身を寄せる↓しばらくしてから、各教室に集合し、安否確認をする。

この訓練を授業時間、休み時間、清掃の時間など、訓練を予告する場合3回、予告なしが2回、年に計5回実施している。また、予告した場合には、「落ちてこない、倒れてこない」場所を子ども自身に考えさせ、自ら判

「落ちてこない」・「倒れてこない」場所に避難



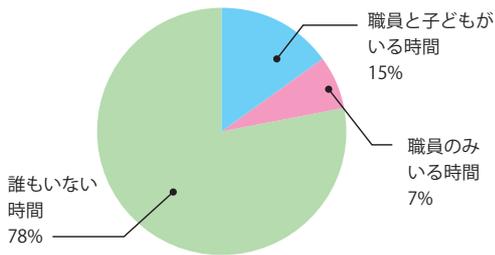
断して行動できる力を身につける。このことは、子どもが家庭や他の場所にいる時も有効である。

家庭との連携および引き取り

3月11日の地震では、通信手段がほとんど使用できなくなった。東京では、交通がマヒし、帰宅困難者が多く発生した。子どもを学校で引き取ることができなくなったり、子どもが家で一人になり不安になったりという事例があった。学校に寄せられた保護者からの様々な意見を整理してみる。

・子どもを学校に引き取りにいつてよいかわからなかった
・学校と連絡がとれなかった
・学校に子どもを引き取りに行ったら、すでに下校していた
・子どもと連絡がとれたのは翌日の午後7時になった
・引き取り人として登録されていない者が行ったら、時

学校に職員がいる時間と誰もいない時間の割合



地域住民による避難所開設 受付カード記入



地域住民による避難所の開設

災害時に、学校が避難所となる場合がある。地震は、365日24時間、いつでも起こる。

間がかかった。親が帰宅したら、子どもが不安で泣いていた、などがある。これらのことから、大地震が発生したときには、通信手段がとれないことを前提として、あらかじめ学校と保護者とルールを決めておくことが大切である。本校では次のようにした。

- ・学校を含むエリアの震度が5弱以上の場合は、子どもを学校に待機させ、保護者は子どもを引き取りに来る。
- ・震度が4以下の場合は、原則的には下校させる。ただし、交通機関に影響が出たという報道があった場合は、あらかじめ学校に届け出のあった子どもは学校で預かる。

平日の昼間は学校に職員が勤務しているが、休日や夜間は学校には誰もいない。学校に職員がいる時間はおよそ22%、誰もいない時間は78%である。78%の時間は、地域住民が自分たちの手で避難所を開設しなければならぬ。本校では、避難所開訓練を次のように実施した。

- ・学校の門と校舎の入り口は、鍵をあらかじめ預けておいた地域の代表者が開ける。
- ・地域の防災担当者が学校に集合し、避難者の受け入れ準備をする。

受付テーブル、受付カードの準備、避難場所の表示、立ち入り禁止場所の仕切りの設置、避難者の整理、名簿の作成（パソコン入力）、防災倉庫を開けて資材の準備、仮設トイレの設置など。

施設・設備の点検

建物の構造体の耐震化が急速に進められている一方で、大地震で、天井や照明器具が落下したり、壁がはがれたり、「非構造部材」の被害が多く発生している。これらについては、日常の点検が大切である。

【学校のできる点検】

- ・天井のひび割れ、ずれ、破損などがないか
- ・教室や体育館の照明で、ふらつき、変形、腐食などがないか
- ・テレビはきちんと固定されているか
- ・書棚やロッカーなどは、金具で壁や床に固定されているか
- ・ピアノは

滑りや転倒防止の対策がとられているか。薬品棚は転倒防止策を、薬品は破損、飛び出し対策を講じているか。ドアや窓枠などの建具にゆがみ、ガタつき、腐食はないか。校舎や体育館の内側の壁や外側の壁にひび割れやたわみはないか。

学校では、目視による点検が主となるが、天井や壁の点検や、器具の取り付け方法などは、学校設置者（教育委員会、専門家）が点検する必要がある。学校の点検で異常が認められた場合も、修理や補強の対策は専門家に依頼する。

これら非構造部材の耐震に関することについて、平成22年度に文部科学省より「地震による落下物や転倒物から子どもたちを守るために」というガイドブックが発行されている。ここには、具体的な点検方法、教育委員会との連携、点検チェックリストが掲載されている。

訓練の形骸化や、たぶん大丈夫だろうという油断が、防げる被害を大きくする可能性がある。ある保護者からは「家で緊急地震速報を聞いたとき、親より子どものほうが落ち着いて行動していて、訓練の成果が出ていると感じた」という声をいただいた。本校では今後、避難訓練のあり方・考え方などについて、保護者や地域への情報発信も積極的にを行い、理解を深めていきたいと考えている。

なさを不思議に思っていた。しかし、州政府「家庭子ども局」アセズ支所長のひとことで納得した。ここでは、学校と社会が連携して「家庭を助ける」システムができていくのだ。

「アセズでは、通報のほとんどが保育園や学校から。法律で教育者に、児童虐待に関する通報の義務が課せられているんです。」この法律は重要であると思う。教師は、虐待などに敏感であることが求められ、気づきのための教師への教育が必須となるからだ。「教師は毎日子どもと接しているわけで、子どもの変化や、身体的精神的に不健康な状態というのは、教師がいちばんわかるんです。たいてい担任、カウンセラーが校長に告げ、校長から家庭子ども局に調査の依頼が来ます。」

この行政局は、日本で言えば、生活保護を担当する福祉事務所と、児童相談所とが一緒になっているシステムだ。スタッフは、学校の通報により家庭の状況を調査し、緊急の状況にある子どもの保護をする。それ以外にも、食物が足りていないとか、家賃がたまっている、といったことがわかると、家庭への食料援助や家計援助を始める。児童虐待の多くが、貧困によるストレスに関係していることから。つまり、学校からの通報は、児童虐待の発見にとどまらず、貧困やアルコール依存、薬物中毒などの家庭の問題の発見にもなるわけだ。

● 社会と結びつく授業

この町にある、公立セントラル高校を見学したときの、校長先生の言葉は印象的だ。

「高校で教えることの最大のことは、人間は仕事をしなければ生きていけない、ということ。どんな仕事を選ぶかということが、どんなに大事な事かということを伝えるために、最大限の努力をしています。」

実に実際の明確な教育方針だ。

授業の半分が学校外で行われる。社会を学ぶために行政機関やNPOなどを訪ね、会社、工場なども見学する。生物の授業では昆虫採集に出かけ、植物園や動物園に行き、次の教室での授業は、復習にあ

てる。生徒は学校の外でいろんな職種に接するわけで、ファーストフードで働く以上の考えをもつことができていない生徒に、たくさんの刺激や夢を与えようとしているのである。



1 職場に1日、毎週いろんな職場に入って仕事の経験をするインターンシップは、30年も前から公立高校で行われている、生徒の人気授業だ。牧場の牛舎で働きオークションに行き、パン屋でパンを焼き、新聞社で梱包、配送の機械を動かす。

また、多くのプログラム、多くの選択科目がある。看護、福祉、料理、ビジネス、マーケティング、財政、アート、メディア伝達、農学、工学、科学技術等。これらAP（促進）コースのクラスは、大学の先生が授業を担当し、大学の単位に換算される。

生徒にはアドバイザーの先生が一人、4年間つく。これは専門のカウンセラーとは別で、一人の教師が12人の生徒を受け持つ。2週間に1回会って雑談する。進路や家庭について、休んだ日や遅刻した日のことについて、何でも話せる関係をつくっている。中退率30%を切り崩すための努力である。

中退者を受け入れるクラシックシティ高校は、教育、福祉畑の有志者が集まってNPOというかたちで計画を進行させ、設立した公立高校だ。乳幼児をかかえた生徒、日中働く生徒、規模の大きい普通高校を嫌ってやめた生徒、態度問題で退学になった生徒などが来る。校内には保育室、喫茶店もある。この学校は、週4日10時始業の単位制。60%が校外授業で、市議員やNPOの仕事をやっている先生がいる。実にオープンであり、そのおもしろさは、とてもここで書ききれないほどだ。

アメリカの社会は日本とは比較できないほど難題尽くめだが、教育者たちは元気だ。社会とつながり、学ぶことは楽しいこと、それは生徒たちの未来の幸せにつながることを、それを伝えたいと一生懸命であるように思えた。🚲

きょういく 見聞録

社会とつながる公教育 オープンな教育システムから思うこと ～アメリカ・ジョージア州 アセンズ市～

私がかつて住んだ、アメリカ合衆国南東部の、ジョージア州アセンズ市。アメリカ最古の州立大学、University of Georgiaがある、10万人の大学町だ。この町の貧困率は、学生をのぞくと24%と高い。だが、それだけに市民が利用できる社会サービスNPOが2600もある。私が、この町のNPOを取材して感心したのは、NPOどうし、またはNPOと行政、と横のつながりが強く頻繁で、必要とあらば、どんなミーティングもすぐに開く、その実践力、実行力である。教育機関も同じ。

アメリカの公立学校といえば、荒廃したイメージしか伝えられていない感もある。しかし私の住んだ町に限っていえば、荒廃を食い止めようと必死の教師たちの姿が浮き上がってくる。

フリーランスライター 折原 恵



● オープンマインドを育てる

ここの小学校で意外だったのは、教師と親のつながりがかなり強いということ。親はしょっちゅう名指しでミーティングに呼び出される。親は働いているから、アポは朝7時、という話も聞いた。保護者に学校をオープンにする積極的な姿勢が見える。

また、ある日、ジョージア大学で日本語教師をしていた友人が、近郊の公立小学校にボランティアで“日本文化”を教えに行くというので手伝いに行った。多目的遊戯室での、2年生2クラス分、60名の生徒に、50分の“異文化”授業である。

友人はまず地図を掲げ、大きな声で「日本がどこにあるか、知っているひと？」と質問。ハイ！ハイ！と、ほぼ全員が元気よく手を挙げる。「では、日本には幾つの島がありますかー？」「6852！」と答えた男子にびっくりする友人。四つと教えるつもりだったのに。予習までしてくる子のいる、人気授業だ。

友人のスピーディで綿密な授業プランにそって、生け花、茶道などをつぎつぎと実演。7歳の子に茶道？生け花？と思ったが、子どもたちの目は輝く。

「こういう精神的な教育は早い方がいいんです。知識よりもオープンマインドを育てる機会ですから。来



月はイスラムの人に来てもらうんですよ」と先生。

“開かれた心”そう、私が、アメリカの学校、いや、社会全体に感じるのは“オープン”であること。

友人が、この担任の先生と知り合ったのは朝市。意気投合してその場で決定。校長の許可を得て、あっという間にこんな授業が成立する。教師たちの確固とした意思と決定力、そして生徒の集中力に、すっかり感心してしまった日だった。

● 学校と行政の連携

“オープン”であることは、学校と行政の連携という面でも感じられた。

日本でも児童虐待、ネグレクトの問題は深刻だが、学校関係の通報者は、わずか15%だ。事件のニュースを読むたびに、日本における学校からの通報の少

京都府 長岡京市立神足小学校 こうたり

まちの未来をともすのは 手作りのLED街灯

「あつ、本当に光った！ やったー！」 「何これ？ すごく明るいぞー」
この日、神足小学校（安久井由紀子校長、478名）では、6年生全員に、学校のすぐそばにある長岡中央商店街のメンバーによる「手作りLEDランプ」の出前授業が行われました。キットを慎重に組み立て、コンセントをつなぐと、強い光が子どもたちの顔を照らし出し、大きな歓声が上がりました。



▲長岡中央商店街のメンバーお手製の実験セットで、電球の光る仕組みや、LEDの性質を教わります。従来の電球は、電気を一度熱に変換し、その高温によって光を出しますが、LEDは電気エネルギーを直接光に変えるので、エネルギーロスが少ないというところを、電球の温度を直接感じて比較できるように工夫されています。手回し発電機で電球を光らせる体験では、LEDのほうが、断然抵抗が小さいことに驚く子どもたち。LEDのエネルギー効率のよさを実感できます。



▲電球の歴史や光の3原色、LEDの発光の仕組みなどもしっかり勉強。その知識をもとに、+極・-極を間違えないよう、配線を慎重につなぎました。ちゃんと光った！

街のメインストリートに輝く 手作り街灯

商店街では、環境への配慮と経費削減のため、07年からLED街灯導入の検討を始めました。しかし、当時は、適切な市販の街灯があまりなく、高価でもあったことから、小さなLEDをつなげた街灯を自作することにしたのです。08年からは、小中学生や地域住民による製作会を行い、学校への出前授業も回を重ね、多くの自作街灯が誕生しました。

現在、商店街の街灯84基すべてが、子どもたちとともに製作したLED街灯に替わり、電力量10分の1、年間約22トンのCO2を削減、電気代と維持管理費は年間約60万円節約という成果が生まれました。大きな成果に、子どもたちも誇らしげです。このプロジェクトは、昨年、環境省主催の「ストップ温暖化・一村一品大作戦」全国大会で、みごと銀賞に輝きました。

街が一体となって子どもを育む

神足小学校では、地域の方々とともに子どもを育てるという風土が根づいています。LEDランプ製作授業でも、前日から商店街のメンバーが機材を選び込み入念に設営。担任の先生方も、単なる体験で終わらせないよう、科学的な知識と地域社会との関わりなどが合わせて身



▲長岡中央商店街のメインストリート「アゼリア通り」での点灯式。



▶環境教育に積極的に取り組んでいる神足小学校の自慢の一つ、ゴーヤーなどを植えた「グリーントンネル」。他にも、中庭に設置された井戸、図書室の新ストロップなど、地域の方の尽力で子どもたちがのびのびと快適に過ごせる環境が整えられています。



につくように、授業の進行や子どもたちの知識について綿密に打ち合わせを行いました。校長先生は、「子どもが心豊かに成長するには、多くの人たちとの出会いや様々な体験が必要。神足小学校の子どもたちは、地域や商店街の方の積極的な応援でしっかりと育まれていることを感じ、本当にうれしく思います。」と笑顔が浮かべました。

おとなになるまで、輝き続けるよ

出前授業の講師を務めた商店街理事長の中小路貴司さんは、こう話します。「小さなLEDを並べ、束ねてできる街灯は、私たちの社会にも似ている気がします。商店街と地域、子どもたちの力が合わさって、大きな成果を生むことができました。全国の商店街と学校にも、この協働を広げていきたい。」子どもたちも「自分の作ったあかりがあんなに明るく光って、街の役に立っていると思うとすごくうれしい。教えてもらったことを低学年にも伝えたい」と意欲的です。

一つひとつのランプには、製作した子どもたちの名前が書き込まれています。長寿命のLEDランプは、約10年もの間、光り続けます。自分の名前が記された手作り街灯は、彼らが成人するまでずっと、街を照らし、地域の安全を見守り続けるのです。



地域に根ざした教育の充実

北海道

松前町立松城小学校校長 増川 正志

松 前町は、250種、1万本の桜咲く、日本一の「さくらの里」であり、北海道唯一の城下町です。また、近代詩文書を開拓し文化勲章を受章した書家、金子鷗亭^{おうてい}氏の出身地です。松前町では、このような松前の特性を基盤にした「教育指針条例」を制定し、地域に根ざした教育の充実を目指しています。

「書道、大好き！」と1年生。

「筆の入りと柔らかな線がいいです」と5年生。

これは、平成22年に文部科学省教育課程特例校の指定を受け、町内6小学校全学年に新設した書道科の授業風景です。

1・2年生は40時間（毛筆は15時間）、3年生以上は35時間を、書道講師と担任がチームティーチングで授業を行います。

書道科を通して、基礎的技能を高めるとともに、日本の伝統文化や文字を尊重する態度、美意識や自省心などの感性を培い、子どもたちに豊かな情操を育みたいと考えます。また、町内の小・中・高等学校との系統性を踏まえた「書の一貫教育」を目指しています。

「私たちがふるさと学習で作った観光パンフレットです。読んでください」と、桜で賑わう松前公園で、4年生が次々と押し寄せる観光客に、手作りパンフレットを手渡しました。「松前の桜」「松前城の秘密」など、昨年の4年生から作り方を伝授された700部のパンフレットは、15分間でなくなりました。

後日、「努力のあとをひしひしと感じます。ぜひ後輩の諸君に続けてもらいたいものです。それが皆さんの『郷土愛』につながり将来のためになるはずです」との励ましのお手紙が届きました。子どもたちは、達成感とふるさとへの思いで、胸をいっぱい膨らませるのです。



自尊感情を高め、よりよい人間関係を築く！

～対人スキルアップ学習「皿倉プログラム」の開発～

福岡県

北九州市立皿倉小学校校長 高橋 英樹

皿 倉小学校では、子ども一人一人の自尊感情を高め、よりよい人間関係を築くことができる児童の育成を目指し「いじめ・不登校防止教育」に取り組んでいます。

現在、どの学校でも、他者との交流が苦手で、人間関係に苦しむ児童が増えていると言われます。トラブルに巻き込まれるのを避け、いじめを目撃しても止めることができない。そういう自分に対して自己肯定心情が弱くなることは、諸困難に挑戦する勇気を萎えさせます。私どもは、学校適応力を高め、ストレスに対処する方法や社会的なスキルを身につける学習を教育課程に位置づけ、実施することが、いじめの防止につな



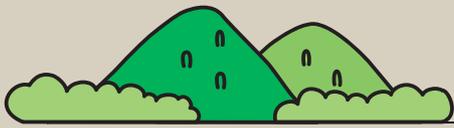
がるのではないかと考えました。そこで、本校でも、いじめや不登校などの学校不適応の状況にある児童に対して、よりよい人間関係を築くた

めの学習プログラムが必要となりました。平成19年度より、九州産業大学の窪田由紀教授を中心とする臨床心理士チームと学校が共同研究プロジェクトを組み、対人スキルアップ学習「皿倉プログラム」の開発に取り組みました。

これは、ソーシャルスキルトレーニングやストレスマネジメント、構成的グループエンカウンター等の心理教育の手法を取り入れた6年間の系統的・継続的な対人スキルを高めるプログラムです。1学期は「安心できる学級づくり」、2学期は「自己理解・他者理解・自己コントロール」、3学期は「協力」の視点で、各学年に応じて担任とスクールカウンセラーが連携して指導しています。

平成22年11月には、研究発表会を行い、公開授業とともに、教師向け体験ワークショップ、窪田教授の講演により多くの先生方へ対人スキルアップ学習「皿倉プログラム」を発信することができました。





地域貢献から国際貢献へ～笑顔でチャレンジ～

岡崎市立東海中学校校長 坂井 節

愛知県

東海中学校では、平成17年度から「豊かな心の育成」を研究テーマとし、①心を耕す「学ぶ意欲の高揚」②心を充たす「生徒活動の充実」③心を広げる「家庭・地域・学校の協働」を実践の柱にて研究を積み重ねています。

「家庭・地域・学校の協働」(ハートフル部会)の実践では、地域に学び、地域に返す地域貢献を主目的にして、国道1号線下の地下道清掃、学区清掃、お花の宅急便、お年寄り表敬訪問、養護学校や授産施設との交流、地域主催行事でのボランティア活動等を展開して



てきました。また、地域との関わりをより深化させるために、月2回発行の「六ちゃんニュース」の回覧により、学校や

生徒の様子を発信してきました。

こうした取り組みにより、保護者はもちろん、地域の方々の本校に対する期待も増進することになりました。そんな中で、「2009東海中学校区発ネパールに学校を作ろう」プロジェクトが、生徒会を中心にスタートしました。

生徒たちは、生徒会新聞にネパールの子どもの様子や学校建設の意義を載せて周知するとともに、文化祭にネパール人の留学生による民族舞踊の出演を依頼する等して意識化を図っていきました。また、具体的な活動として、アルミ缶、スチール缶、新聞、牛乳パック収集、募金活動で学校建設の資金を調達しました。現在、ネパールの第2の都市ポカラから車で山道2時間かかるシュルドジュリー村に小学校を建設しています。

この村に、昨年12月、卒業生の高校生2名とともに総勢11名で訪問し、子どもや村人から熱烈歓迎を受けました。今年の文化祭では、卒業生により、その時の様子をネパール紀行として発表を行います。今は、中学校建設の資金づくりに奮闘中です。

学校に和文化の風を

由利本荘市立矢島小学校校長 金 利紀

秋田県

矢島小学校は、古くはお城だった所に建てられた学校である。学校の入り口にはお堀があり、校門には大手橋が架けられている。周りには、たくさんの神社やお寺が建っている。歴史と文化の香り高い町にある学校である。

それらの思いから、矢島小学校では和文化教育(伝統・文化に関する教育を、本校では「和文化教育」と呼んでいる)を重視している。「日本の伝統・文化に親しみ、日本のよさを感じ取ろう」というねらいを持っている。

年1回「和文化教室」と称して、全校児童が座禅・茶道・お琴・民話・昔遊びの5教室に分かれ、それぞれ興味ある分野を体験する。地域から講師を招き、和



文化(地域文化)のすばらしさ・日本(地域)のよさを感じ取ることができる。また、クラブ活

動の時間には、茶道・囲碁・俳句・なわなひ・番楽・昔語り……を取り入れている。もちろん講師は全て地域の方である。更に今年度は、邦楽(琴・三味線・尺八)演奏体験や邦楽鑑賞会も実施した。

本校の和文化教育は、「校長の趣味やノスタルジーでやるものではない。ましてや、世間の流行に乗ろうというものでもない。教育の根本にかかわる取り組みである。」という共通理解から出発した。自分の国を愛し、誇りに思い、自国の文化や伝統をきちんと説明できること、そのことは他国の文化をも尊重し、他国の考え方も理解しようとする「真の国際人」の育成につながると確信している。

本校では、日本を愛する「和文化教育」と地域を愛する「ふるさと教育」がコラボした形で、推進されている。

今、矢島小学校にはふるさとの薫りが色濃く漂い、和文化の風がさわやかに吹いている。





地球となかよし

ゼミナール



子どもたちのメッセージに学ぶ

毎年募集している「地球となかよしメッセージ」。全国のこどもエコクラブからも、たくさんの作品が届きます。今回はその中から、自然とのふれあいについて考えます。

地域の自然とのふれあいが豊かな学びを育む

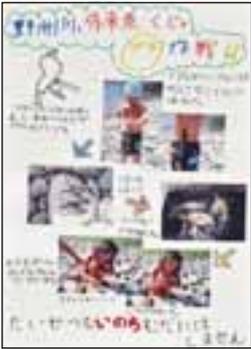
財団法人日本環境協会 事業部長

川村 研治（こどもエコクラブ全国事務局）

近年、水辺で遊ぶ子どもが全国的に減っています。河川改修で水辺に近づけない川が増えたことや、水の汚れなどが原因ですが、作品を寄せてくれた、滋賀県の伴鼓太郎さん・菊香さんの家の近くに流れる野洲川には、子どもたちが安心して遊べる川原が残っています。遊び相手になる生きものもたくさんすんでいて、二人はしょっちゅう川に遊びに行っているようです。

日本最大の琵琶湖に注いでいる野洲川には、アユなど川と湖を行き来する生物がたくさんすんでいます。鼓太郎さんと菊香さんは、アユ釣りの盛んな地元の川で遊ぶうちに、外来魚・ブルーギルの特性や食害の問題を的確にとらえています。また、二人は、悪者として扱われるブルーギルを捨てずに食べることが生命を大切にすることになる、と考えを深めています。

野洲川、外来魚くじょプチ作戦!!
滋賀県こどもエコクラブ「石部ふれあい森の会」
3年 伴 鼓太郎・1年 伴 菊香



ぼくのすんでいるしが県には、びわ湖があります。今びわ湖は外来魚のせいでこゆうしゅがへってこまっています。でもそれは湖だけではありませんでした。ぼくたちがよくあそびに行く野洲川にもなんとブルーギルがいたのです。野洲川はあゆつりがさかんな川です。あゆのち魚が食べられてしまうんじゃないかとしんばいになりました。そこでぼくもくじょすることにしました。ただするだけじゃかわいそうなのでやいてたべることになりました。たとえ外来魚でもがんばっていきいます。たいせつなのち、むだにはしません。

いきています」と言い切れるのは、生物とのふれあいの経験が豊富で、深いからです。水辺での体験の積み重ねが、地域の自然への愛着につながり、生きものを守る行動や、生命を慈しむ感性に結びついたことが、この作品からはっきりと読み取れます。

また、埼玉県の武川勇之助さんは、自分の家の近くを流れる槻川の名の由来（槻ケヤキ）を聞き、児童館の仲間と一緒に源流を探して山を歩きました。小学校高学年になると、遊び場所が急に広がり、空間認識の拡大とともに風景の見え方も変化します。この視界の広がりが、川はどこから流れてくるのだろうかという関心と、行動につながったのです。

たどり着いた源流では、本当にケヤキの根から水がしみ出ているのを目の当たりにし、これが川の出発点となっていることに自然の神秘を感じています。森のためた水

槻川源流をたずねて
埼玉県 小川町児童館エコクラブ
6年 武川勇之助



「土がべたべたしていた。」「根っこのところから出ているのが不思議だった。」「あんなに少しなのに、川になるほど水が多くなってすごい。」これが、槻川の源流を見ての感想です。

槻川は、槻の木の根元から湧き出したので「槻川」という名前になったと聞きました。1時間以上山を歩き、その間いろいろな木や草花を見ました。槻川には3つの源流があります。それが重なって小さな流れとなり、小川町の大切な川、槻川となりました。この水を利用して和紙も作っています。

この川にたくさんの魚や水生生物がいることをみんなに知ってほしいです。

が、あちこちで湧き出し、しだいに大きな川となっていくこと、魚や水生生物のすみかとなっている清らかな川が、自分たちの町特産の和紙を作るために欠かせない、きれいな水を供給していることなど、森の大切さを体感した一日となったことでしょう。

自分の住む地域の自然とのふれあいから子どもたちが学ぶことの幅広さは、大人の想像を超えるものです。豊かな自然から体験を通して学んだ子どもたちは、生命をいとおしみ、大切にすることを、大人たちに教えてくれる教師でもあります。これら二作品のこどもエコクラブの活動のように、こどもエコクラブの環境学習は、一方的な情報の伝達ではなく、大人と子どもが体験を共有し、互いに学び合うものだ、改めて実感しているところです。

わたしのすべきことはなに？



香山 リカ
(精神科医・立教大学教授)

大震災がきっかけで、いろいろなことが変わった。それは、おとなばかりではなく、子どもたちにしても同じだと思う。診察室である母親が言っていた。

「小学2年の娘が、あれからさかんにきくんです。もし、地震が起きたらうちの家族はどうなるの、お父さんやお母さんが死んだら私や弟は学校に行けないの、って。これまでなら、“そんなこと、起きないわよ”と答えられましたが、いまはそうもいきません。何て答えたらよいのか、私も言葉が見つからないのです。」

おそらくその子は、自分なりに「家族とは、命とは」という大きな問題に向き合っているのだろう。そういう真剣な問いに対しては、「私にもわからない。でも、どんなときでもお母さんたちはあなたたちを守ろうとするから」と答えるしかないのではないのか。

では、「私も被災した人たちのために何かしたい」という子どもの願いには、どう応じればよいのだろうか。ボランティアに行きたい、何かを送ってあげたい。テレビを見ながら、そう思っている子どもたちも少なくないのだ。簡単に「あなたが



イラスト ひらた せいじ <http://rakugakyo-yh.com>

できることなんて何もないんだから、まずは自分の勉強をしなさい」などと言わずに、まずは「被災地のことを考えられるあなたはやさしい子だね」とその気持ちを大切にしたい。

ただ、「いますぐ何かしたい」と先を急ぐ子には、「ちょっと待って」と声をかけることも必要だ。今回の震災の支援は、長い道のりになる。もしかすると、いま10歳の子が大学生になる頃でも、まだ復興ボランティアを必要としているかもしれない。そういうときに、まわりのことも自分のことも大切にできるボランティアになるためには、どんな準備が必要なのか。たとえば、ボランティア活動に行った人が新聞や雑誌などに寄せている手記を切り抜いて読む。避難所にいる人たちの記事などを読んで、「もし私がボランティアだったら」とみんなで話し合う。そんな“未来の支援者”になるための準備も、立派な支援なのだ。

支援って、今すぐ何かをしてあげたり、ものをあげたりすることだけじゃないんだよ。子どもたちにはそう伝えて、長い目でそのやさしい心を大切にできる人になってもらいたい。

東日本大震災支援

つなごう、こころの手

教育出版では、「地球となかよしメッセージ」の特別版として、震災で被害を受けた子どもたちへのメッセージを募集しました。全国各地や海外から、1900余のあたたかい言葉が届きました。

いただいたメッセージは、教育出版ホームページに掲載するとともに、『Educo 特別号』として、被災地域の学校や避難所などの子どもたちに届けています。



こどもエコクラブとは

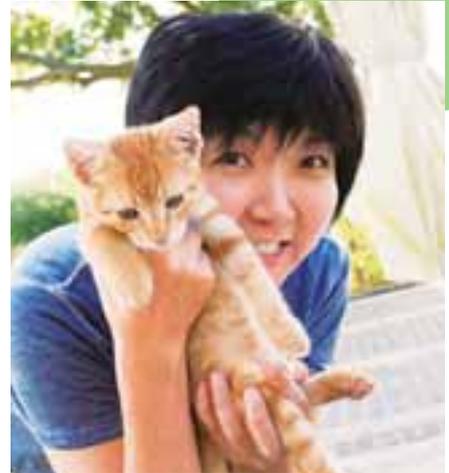


子どもたちが人と環境の関わりについて幅広い理解を深め、自然を大切に思う心や、環境問題の解決に自ら考え行動する力を育成し、地域の環境保全活動の環を広げることを目的に、子どもたちの環境保全活動や環境学習を支援しています。

<http://www.j-ecoclub.jp/>

ほっとな

出会い



犬猫写真家

新美 敬子さん

1962年愛知県生まれ。テレビ番組制作の仕事で映像と写真を学ぶ。20年以上、世界各地で出会った犬や猫と人の暮らしを撮影。訪問国数は60カ国に及ぶ。著作『世界の旅猫105』（講談社文庫）、『職業犬猫写真家一猫とわたしの東京物語ー』（日本カメラ社）など多数。各写真コンテストの審査員としても活躍。

犬猫の写真を撮り始めたきっかけ

1988年ごろ、テレビ番組制作会社の仕事で外国に行ったとき、特にヨーロッパで、犬や猫の飼いが日本と全然違う、ということに気づきました。当時の日本では、犬は鎖につなぎっぱなし、猫は増えっぱなしという状況が多かったんですね。人間の都合だけを優先しているというか。ですから、海外の、犬や猫が、人とともに幸せそうに暮らしている写真を撮って見てもらったら、少しでも日本の犬猫の生活が改善するのではないかと。それが犬や猫の写真を撮り始めたきっかけです。大仰な物言いですが、啓発したい、という思いがありました。

そして、心の痛むのが、捨て犬・捨て猫の問題です。近年になって問題意識をもつ人も増えましたが、日本では、施設に持ち込まれた犬猫の殺処分が本場に多い。諸外国では、各家庭に引き取られることを前提にして環境を整えた施設が以前から充実しています。外国のそういう面も、折に触れて作品で紹介してきました。

今、日本でも意識が向上してきて、殺処分ゼロという方向に向かっていて、自治体もありまを期待しています。

犬や猫が幸せな社会は、人も幸せ

犬や猫が苦手という人もいるのは当然ですが、排除という考えに向かわない方向を考えたい。各国に撮影に行っていますが、猫の多いこと有名な地中海の島、マルタでも猫嫌いの方はいました。でも、街全体として、猫と共存することを容認するおらかさがある。オランダのアムステルダムも、人と猫がいい関係で暮らしている印象を受けました。とにかく、住んでいる人どうしが、よくあいさつをする街なんです。相手を受け入れる土壌があるという感じ。日本にも、気軽にあいさつして、猫が店番をしている、そんな商店街がたくさんあります。犬や猫が幸せな社会は、人も幸せだというのが、いろんな国、街に撮影に行っていることです。私の写真で、そういう社会って

いな、と思ってくれたらうれしいですね。ただ、私が思うのは、犬や猫を飼えば人間が幸せになれるというわけではなく、彼らを幸せにしたら、自分も幸せになれる、ということなんです。子どもの情操教育のためとか、何らかの効果を期待して動物を飼う、といったことを耳にしますが、そういうことは自然に彼らが与えてくれるものであり、人間が勝手に期待してはいけないと考えています。

「あなたらしさ」を撮りたい

犬や猫の写真を撮るときには、どんな子でも、最もあなたらしい、美しい表情を撮ってあげるね、と思って撮っています。美しいしっぽが自慢、としっぽを振っていたら、しっぽをさりげなく構図に入れて撮ってやるとか、その犬、猫がいちばん自信をもっているところを撮ってあげたいんですよ。

私は、いろいろな写真コンテストで審査員を務めています。子どもが被写体の応募写真も多いんですが、うまく撮ろうと構えて撮っているものより、その子らしさを撮りたい、という気持ちが表れている写真にひかれます。そういう写真は、撮ってもらった子どもも必ず喜んでくれるはず。今、デジタルカメラが普及して、親御さんや先生たちも、子どもの写真を撮る機会が多いと思います。「うまい写真」を撮れる人はたくさんいる。でも、親御さんや先生は、いちばん「その子らしさ」がよくわかっているはず。その瞬間を切り取って、写真を撮る・撮られる喜びを共有してほしいなと思います。



12カ国の街角「猫のぼん」(日本出版社)

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆ 雅楽師、東儀秀樹さんの言葉。他のジャンルを楽しんだからこそ、伝統的な雅楽と照らし合わせる素材を獲得したこと、「やってみよう」と一歩踏み出した者にだけ得られる可能性があること。これらには、基礎は幅広いほうがよいこと、一歩踏み出す勇気が自分を幸せにするなど、教育を考えるヒントが多くある。(兵庫県 長瀬荘一) ◆ 地球とながよしトピックスの、NPO法人「鎌倉てらこや」の取り組み。子どもたちの成長・発達を助けるとともに、地域の連帯・地域づくりやまちづくりの基本ともなる活動で、大いに奨励されるべき内容だと思います。(埼玉県 松田温昭) ◆ 「ほっとな出会い」 柏原電二さんの駅伝にかける夢。大スランプから箱根の大会まで根気よく練習を続け、体と心をつくったのは本当にすごい。「走ることで人生を変える」という哲学が、夢を現実にする精神をつくり上げています。(東京都 日高芳一)



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進歩や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球とながよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。